

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

ーフィールドワークの実践（第二期）ー

（5年計画の1年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士夫・篠塚 明彦
山田 耕太・宮崎 大輔・宮崎 章
吉田 俊弘

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

－フィールドワークの実践（第二期）－
（5年計画の1年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

大野 新・小澤富士夫・篠塚 明彦
山田 耕太・宮崎 大輔・宮崎 章
吉田 俊弘

要約

今年度から始まった第三次スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の研究テーマとして、社会科では第二次に継続する「科学者の社会的責任を考える」を掲げた。また、プロジェクト研究においても『科学者の社会的責任を考える』授業づくりを継続して掲げた。2008・2009年度は広島で実習を行い、原爆の学習を通して科学者の社会的責任を考えた。2010年からは新たに水俣で実習を始めた。本報告は、3年目をむかえた水俣実習の記録である。

キーワード：フィールドワーク 科学者の社会的責任 水俣 水俣病 社会科学習 ゼミナール

1 はじめに

昨年度の「科学者の社会的責任」を考える水俣実習を企画していく中で、留意したのは、準備段階での学習の進め方や事後のまとめ方を工夫することであった。3年目ともなると、準備に関してはだいたいのノウハウをつかむことができたので、提示資料等も含めて、それほど苦勞する部分はなかった。本報告では、昨年度との相違点に焦点を当てながら、今年度の実習の報告と今後に向けての展望について述べる。

2 高2ゼミナール

「水俣から日本を考える」（大野 新）

2.1 実習までのゼミ実施概要

本校の高校2年生を対象としたゼミナールは、土曜日を使い、6月以降年間7回設定されており、1回について3～4時間が使える。今年の選択者は7名だった。

水俣での実習を考えた時、まず中学1年時の学習の内容をどのくらいベースにできるかを考える。しかし、受講した生徒から話をきくと、何らかの関心をもって選択はしたが、中学校の時学習した具体的な知識はあまり残っていなかった。これは例年通りの状況である。

したがって、今年も水俣に関する学習から再びはじめることにした。

以下、全10回（臨時もふくむ）授業の実習までの内容について述べる

第1回：ガイダンス・水俣に関する総合的学習(1) 〈6月16日〉

本ゼミナールの概要を説明し、各受講者からの講座選択の動機を聞いた。

水俣病に関する学習としては、4冊のテキストを準備した。①『水俣病小史』 高峰武編 熊本日日新聞社 ②『証言水俣病』 栗原彬 岩波新書 ③スーパーサイエンスハイスクール 総合講座講演記録集 2006年3月 筑波大附属駒場高校 ④2年間の実習報告書である。加えて、最近の水俣に関する新聞記事を配布した。新聞記事に関しては、現在の水俣病をめぐる情勢を知る上で役立つ。

次に、映像を視聴した。「水俣病—その20年—（1976年制作）」である。古い映像であるが、当時の時代状況を知る上で好適と考え視聴することにした。昨年の実習中に、水俣病発生当時の時代状況の話が多く出され、生徒がいま一つ実感を持っていない部分があった。そのため実習後にこれらの映像を視聴したが、今年は事前に見せることによって、高度成長期の時代背景を多少なりとも理解した上で実習に臨むこととした。

続いて、今年のスケジュールの概要を示した。今年も昨年の経験をふまえて、おおまかな行動計画はあらかじめ決めておくことができた。実習参加人数が少ないことから出水の農家訪問実施はあきらめた。

第2回：水俣に関する総合的学習(2)

〈6月30日〉

この日は4時間を使い、1回目の続き（水俣に関する学習）と、夏の実習の計画づくりを行った。まず「水俣病—その30年—（1987年制作）」を視聴した。これは前回見せた20年史の続編であり、水俣病史を知る上で重要な作品である。続いて2010年5月10日に放送されたNNNドキュメント10'「未来への診断書 水俣病と原田正純の50年」を視聴した。昨年の実習でお話をうかがうことができた原田正純先生の人生と水俣病との関わりをテーマにした番組である。残念ながら6月に原田先生は亡くなられたので、昨年のように生徒たちに伝えた。

続いて『水俣病小史』を使って水俣病の歴史を簡単にふりかえった。今年を受講生には高校から入学した生徒が3名おり、中学校での水俣の学習を経験していないためポイントをおさえながら行った。

後半は、実習の準備を行った。まず生徒各人に水俣病で関心のあることについて発表させた。国の対応、医学の対応、マスコミなどがあがった。しかし、この時点ではまだ深い問題意識は持っていなかったため、資料を読み進めるよう指示した。

第3～4回：実習準備〈7月中に2回〉

正規の授業時間とは別に2回ほど集まって8月のフィールドワークにむけた準備を行った。今回も実習のコーディネートをお願いした環不知火プランニングから訪問が可能な方々のリスト（48名分）が送られてきたので、それを検討しながら訪問先を決めて行った。資料館、相思社、JNC工場の訪問は基本として入れさせた。決定した訪問先には質問票を送付した。中学校からの生徒は中学2年・3年でフィールドワークを行った経験があるので、質問票のとりまとめに多少時間を要したが、実務的な面での不安は少なかった。

3 水俣実習報告（大野 新・山田耕太）

3.1 実習の概要

日程：2012年7月26日（木）～7月29日（日）

行き先：熊本県水俣市および熊本市

引率教員：大野 新・山田耕太

参加生徒：高校2年生7名

引率2名ほか学年担任（更科）同行
計10名

3.2 おもな行程

- 1日目午前 熊本空港経由水俣入り
午後 親水護岸、百間排水口見学
水俣病資料館見学
- 2日目午前 班別フィールドワーク（1）
水俣市民に聴く（班行動）
午後 ①相思社
②JNC水俣工場
- 3日目午前 班別フィールドワーク（2）
水俣市民に聴く（班行動）
午後 水俣市民に聴く
- 4日目午前 熊本学園大学訪問
午後 熊本空港経由空路帰京

3.3 生徒が記録した実習報告

実際の実習内容については、生徒の報告書をもとに、おもな訪問先とそこでの聴き取り内容を紹介する。（昨年と同じ訪問先は割愛した。一部表現を修正した。）

1日目午後

1. 水俣病総論と市内案内

○吉永利夫さん（環不知火プランニング理事長）

最初に、吉永さんの自己紹介をしていただき、このゼミで僕たちが訪問する方々の簡単なプロフィールを教えていただいた。さらに自らの体験談を交え水俣病問題とは何なのか？これからの水俣はどうあるべきかについてお話をしていただいた。

水俣病問題が発生した高度経済成長期は、今現在とは比べ物にならないくらい仕事にあふれていたうえ、給料も毎年上がっていた。そんな時期があつてこそ現在のような恵まれた時代がある。しかし、その時代を構築し、形成する陰でどのようなことが起きていたのか。隠された被害者や犠牲者がいたのではないかと、この点に着目していった。今の日本は、あらゆる法や制度によって成り立っている。しかし、それらは正常に機能しているのだろうか？本当に、人のためになっているのだろうか？

例として、水俣病患者の認定制度についてあげてみる。本来、病気とは医者が患者を診断することによって初めて『病気』と認められる。しかし、水俣病は補償金などがからんでいるので、手順はもっと複雑だ。水俣病認定を受けるにはまず審査会という場所で複数の医師に水俣病と診断され、その後、知事が正式に認定をだす。患者が審査会に認定を求め、審査会がその結果をチッソに通達し、それを受けてチッソが患者に

補償金を出すのが正常な水俣病認定の仕組みだ。だが、吉永さんいわく、これは正常に機能していないという。

この前、水俣病認定の申請の締め切りがあったが、それに合わせてたくさんの患者たちが名乗り出た。何故、彼らは今になって名乗り出たのだろうか？水俣病患者に対する、差別や偏見を嫌がったり、年老いてから水俣病の症状が出てきたり、水俣という町の中心である JNC(旧チッソ)に遠慮していたからだろうか。正直、伝染病ではないし、見た目も普通の人たちとなんの変りもないんだし、大した差別などないだろうと思っていた。しかし、つい最近こんなことがあったそうだ。中学校のサッカーの試合で、接触の際に、『水俣病触るな』などの暴言を受けた。ある、ハンドボールの試合では相手校のOBや応援席から同じような発言が飛び出した。このことは、新聞記事にもなった。

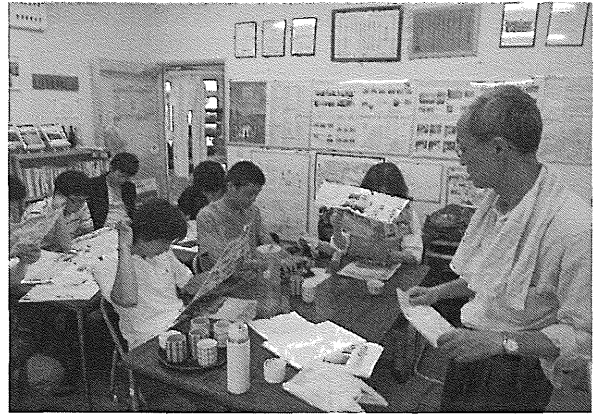
水俣に住んでいるだけでこの扱いなのだから、もしも、認定患者になったら……。という不安が根付いている。しかも、差別は水俣市の外からだけではない。水俣市内でも患者の方は、そうではない市民からも差別を受けている。病気で差別される苦しみを知っているはずなのに、彼らは何故差別をするのか？“水俣市在住”ということだけによって差別されてきた。『有害だと知っていたのに食べた患者が悪い』という主張もあるが、誰が何と言おうと悪いのは有害物質を流し続けたチッソである。差別されたことによって生じたストレスは本来チッソにぶつけるべきだ。しかし、ぶつけようにも、もうこれ以上補償金や謝罪がでる見込みはない。そこで、自分たちよりも弱い存在である患者たちがストレスのはけ口になってしまうのだ。

患者やその他の市民の人たちのそういった行為は、全て『水俣市民であることに自信を持ってない・胸を張ることができない』ことからきている。自信をつけるためにはどうすべきか？それは、他人から褒められたり、自分はこれをしたんだ！！と胸を張ることができ何かを作ればいい。

では、水俣市がそういうものを作るにはどうしていけばいいのか。そこで、出てくるのが『水俣病』である。多くの犠牲者・被害者を生み、現在の差別やマイナスイメージの原因ともなった水俣病ではあるが、同時に貴重な経験とそう簡単には得ることのできない、教訓を手に入れた。そして、何よりマイナスよりとはいえ全国にわたる知名度を手に入れた。それらを有効に使いビジネスとして昇華させることで、前を向き一歩先に進めるのだという。

たしかに、僕たちも水俣病があったからこそ、こう

して水俣へと訪れたのだ。そうでなければ、東京から遠く離れた田舎町に来るはずがない。それを考えると僕たちは吉永さんの策略にまんまとはまっているのかもしれない。



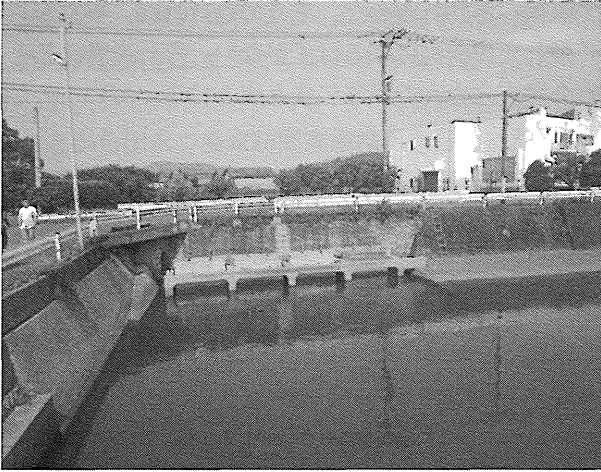
2・水俣市内

総論のあと、レンタサイクルに乗って、吉永さんに水俣市内を案内していただいた。

①百間排水口

昭和7～43年までチッソ水俣工場のアセトアルデヒド製造過程における工場排水の排水口として使われていた。排水には有機水銀のほか、ダイオキシンやマンガンなどの有毒物質も含まれていた。海とつながっていたため、排水はそのまま水俣湾へと流れ込み、水俣病を引き起こす原因となった。流された水銀は150トン以上ともいわれ、有毒物質を含んだヘドロは4m以上にもなったという。今では埋め立てられているが、地下にはまだヘドロが溜まっている。しかし、液状化現象によってそのヘドロが地上に噴き出す恐れもあるので、まだまだ、気を抜くことはできない。現在も工場排水、生活排水が流れており、有毒物質が含まれていないかどうか、安全性を確かめる調査は、現在も引き続き行われている。

このような説明を吉永さんにしていただいている時、ちょうど学校の先生たちの研修とはち合わせた。水俣病に関する教育を入念にするため、教員の方々は水俣病について深く知る必要があるとのこと。人にもものを教えるにはより深くその事柄について知る必要がある。東京ではうちの学校ではせいぜい数時間程度しか費やすことができないし、他の学校でなんて一時間分すらやらないだろう。あくまで、学校の授業を大学に受かるためのものとする学校もあるが、教育は、特に社会系はこういった問題をより深めるほうが重要だと思う。



②水俣病資料館

まずはじめに、到着して気になったのが、資料館周辺の地面である。アスファルトや土ではなく、青や緑の固い何かでできていた。これは、ワインなどのガラス瓶を再利用したものである。資料館のまわりだけではなく、市内の至る所にあるらしい。水俣病という環境問題を体験した水俣市では、環境都市としての取り組みに力を入れている。特に、ゴミの回収などは 20 種類以上にも分別するという。

さて、水俣病資料館だが、正確に言うと国立の『環境省水俣病情報センター』と県立の『熊本県環境センター』、市立の『水俣病資料館』の 3 つの資料館が併設されている。僕たちは『水俣病資料館』を訪れた。情報センターでは毛髪から、体内の水銀濃度を出せるらしく、そこにも行ってみたかったが今回は時間の都合上かなわなかった。

館内では、まず、水俣病患者の分布を表した模型を見た。



不知火海沿岸での患者は約 2,273 人。総論の時にも述べたが、これは正確な数値ではない。分布図をみると、距離はそれほど離れていないのに、患者の数が数倍以上違う村と村がある。これは、魚の売り上げが落

ちないように、村で申請を禁じる、ことがあったからだ。逆に患者が多いところは、村が申請を出すように呼びかけたうえで、初期は申請すればすぐに認定されるくらい、申請が通りやすかったからだ。

しかし、水俣病は不知火海だけの問題だったのだろうか？メチル水銀をため込んだ魚はいったいどこまで泳いで行くのだろうか？

研究チームの調査では最も遠い場所で鹿児島湾だったという。

また、有明海でも調査が行われた。水俣病と同じような異常が発見されたものの、他にも水銀工場があったため、チッソの排水によるものなのかは分からず、調査は失敗に終わってしまった。と言っても、環境問題が発生していることが公式に確認されたので、無駄にはならなかったと思う。(某新聞社が奇病として発表して誤認識されたりもしたが・・・)

しかし、これらの調査は基本的に患者か否かしか焦点を当てなかったため、どのような生活をしている人が発病したかの詳細な資料が不足している。現在、水俣病がどの範囲にまで広がっていったかが確認できないのも、水俣病発生初期の調査をおろそかにしたからだ。もっと言えば、被害を抑えることも出来たかもしれない。

館内には他にも見舞金誓約書などが展示されていた。その中には水俣病が確認された昭和 20 年頃よりもはるかに昔、大正 15 年のものもあった。見舞金誓約書とは簡単に言えば、見舞金は払ってあげるけど、自分たちは悪くないよというものだ。このような書類が作られていたということは、この頃にはすでに、有毒物質が流され、住人達に健康被害が出ていたのだろうか？

その後、さらに進んだ先に水俣病に関連する裁判についての展示へと移って行った。座り込み運動や裁判などのあらゆる場面の写真が展示されていた。その中でも印象に残ったのが、川本さんという方が、チッソが会見しているところへ乗り込み、社長である島田さんに血判を押させようと迫っている写真だ。1 株株主になって株主総会に乗り込んだり、会見している時に机の上に座って、社員の耳元で怒鳴りつけるなど、行動的ではあるが、やや、やりすぎているという認識は元々あった。しかし、さすがにこの写真を見たときは驚いた。正直、借金を回収しに来た暴力団が、債権者に掴みかかっているようにしか見えなかった。相手が水俣病を引き起こすという、償いきれないほどの過ちを犯したからとしても、限度を超えていると思う。

当時、島田社長の娘さんも被害者側のそういった行動に対し『被害者たちは酷い。やりすぎだ』などという父親を心配していたという。だが、そういう時、島田社長は決まって『彼らはもっと大変な思いをしているんだから、そんなことを言うな』と諭していたという。

それらの展示以外にも、色々なものがあった。水銀とはそもそもどういった物質なのかという詳細な説明や、チッソ製の商品を展示しチッソ製品がどれだけ世の中に浸透しているのかを伝えるものがあった。例えば、今ではTVやPC、ケータイや電子ゲームなど、ありとあらゆるものに使われている液晶。その原料はチッソが世界で50%以上のシェアを誇っている。

数多くの資料があったがその中で一番印象に残っているのは、劇症型の患者や猫実験の際の映像である。それらは、学校の授業でも見だし、水俣に行く準備としてより、詳細な映像を見たりもしていたので、決して初めて目にしたわけではない。にもかかわらず、頭から離れなかった。

③親水護岸



資料館から少し自転車で、移動すると不知火海に面した親水護岸に出る。陸地に囲まれた、穏やかな海のため、とても良い漁場だ。しかし、その地形がメチル水銀をため込み、水俣病が発生した。この周辺の埋め立て地の造成費は約250億である。

この周辺の草地の地下には、有毒物質を含んだヘドロがゴムシートで覆われて埋まっている。ただ、ゴムシートはせいぜい厚さ1mm程度しかないため、もうすでに破れていると思う。埋立地のため巨大な建物は建てられないものの、野球やサッカー、ラグビーなどのコートが造られていたり、ところどころに木が植えられていたりした。

海沿いの石畳で覆われた場所には、ドラム缶が埋められている。その中には、汚染された魚がミンチ状にされて詰められている。いくら元となる排水を止め、

ヘドロを除去したとしても、魚の中に残っている意味がないし、放っておいたら食物連鎖によって、水銀が濃縮されてしまう。本来、人の口に入れるために魚を獲る漁師の人たちは、どんな気持ちでミンチにする為の魚を取っていたのだろうか・・・。

写真は、水俣病患者の慰霊碑。チッソ付属病院で水俣病が公式確認されてから50周年にここに建てられたという。今では毎年追悼式が行われており、鳩山元首相も参列したことがある。慰霊碑の中には、被害者・犠牲者の方々の名前が記されている台帳が入っている。やはり、これにも差別や偏見を恐れて、名前を記さない人がいるという。

慰霊碑の左隣には鐘があり、吉永さんからお話をうかがった後、鳴らして全員で黙祷を捧げた。



④坪谷

親水護岸からそのまま海沿いに進むと小さい港に出る。その奥にある入江が坪谷だ。ここは、初めての公式認定された水俣病患者が出た場所だ。現在では空き家となっている。

ここは、百間排水口からかなり離れているため、水俣病患者が出始めたころはチッソが原因だと疑われなかったのである。はじめは、精神病だと思われていたり、近くのと殺場から垂れ流された血液が原因で引き起こされた伝染病だと思われていた。他にも、旧日本軍爆薬説や東工大の教授が発表したアミン説などがあった。はっきり言って、アミン説などは、本当に大学の教授の考えなのかと疑いたくなるようなものである。しかし、発言力も信憑性も伴っていたせいか最有力説となっていた。そのおかげで、調査の開始が遅れたのである。チッソの営業制限は国にとっても芳しくないもので、国とチッソ、大学が共謀していたとも思ってしまう。

⑤感想

水俣の街を見て思ったことは、少し栄えている何の

変哲もない、地方都市であること。にもかかわらず、所々に『水俣病』という爪痕が残っているのが分かった。

ぱっと見た感じでは分からないけれど、知れば知るほど当時の過酷さだとか、せつなさが伝わってきた。特に、坪谷では被害者家族たちに降りかかった災難や悲劇を考えるとやるせなくなってしまう。直接ではないが3・11のがれきの山を見たときと同じくらいかそれ以上のものを感じた。いままで、漠然とした何かでしかなかった『水俣病』という問題が自分の中で形になっていった気がする。(担当：内海)

2日目午前

2. 水俣市民に聴く

1) 原田利恵さん

原田さんは1968年に生まれ、高校卒業までは熊本市に住んでいた。父親は著名な水俣病研究者の原田正純さん。現在、環境省の国立水俣病総合研究センター(以下、国水研)の国際・総合研究部の社会科学室研究員として(つまり国家公務員である)、水俣駅前商店街の一角に「むつかどラボ Atelier」という事務所を構え、市街地の活性化に努めている。

①水俣に関わるきっかけ

高校卒業までは熊本市内に住んでいたにも関わらず、紹介されるたびに「水俣病の原田先生の娘」というように言われてしまい、常に水俣病の暗いイメージとタブー感が付きまとい、とても重たく感じていたそう。

東京の大学に進学すると、有名な環境社会学者である飯島伸子さんが隣の研究室にいたことから環境社会学の道に進む。そのころ父の著書も初めて読んで水俣に興味を持つようになった。

それでも水俣とは関係のない職業に就き、心身とも水俣から遠ざかっていたが、水俣病の被害者・支援者の子供(「第二世代」)が次々と水俣に戻って活動していると聞いて、自分には何が出来るだろうと考えるようになり、家族を東京に残して国水研に入った。

②国水研とは

国水研とは、二度と水俣病の悲劇を繰り返さないために水俣病に関する調査・研究を行い、水俣病患者の医療を向上させるための国立の施設である。しかし元所長が原発事故に関して「放射性物質は海で希釈される」と発言したことなどから、国水研は基本的に被害を低く見積もるための調査をすところだと考える人もいる。

水俣市民からしてみれば、原田さんが市街地で事務所を創設した際に「国水研が山から下りてきた」と言

った人もいた(※国水研は水俣市・浜地区の標高が高い所に位置している)ように何をやっているかもわからない得体の知れない、遠い存在であるようだ。

ちなみに、原田さんは国水研という国の組織に属しているの、あくまでも加害者という立場であると意識しているようで、もしも正純さんの追悼イベントなどに参加するとしても遺族としてではなく加害者である国の者として参加するそう。

③水俣の現状

水俣の商店街はここ20年で店舗数が半減し衰退している。そこで原田さんは全140店舗に聞き取り調査をするなどして街の活性化を模索している。

だが現状はあまりよくない。例えば、

- ・最大8つ(現在は7つ)に分かれてしまった商店会どうしの仲が悪い。
- ・利便性や客対応の無愛想さの面でスーパーやコンビニに利用客が流れる。
- ・後継者がいない店はその代で店を閉めることを望んでいて、アンケートによる意向調査では市からの後継者の斡旋を希望する店がほとんどなかった。

というように、商店街はまさに「うつ」状態といっても過言ではない。だから、このまま何も対策を打たなければ店舗数はますます減少していくと思われる。

そんな中、2008年より「円卓会議」という市民参加型の街の活性化に向けた議論の場が設けられた。また、翌年の特措法(「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」)施行以来、国・県が水俣の「再生」に関与するようになり、国・県からより補助金がもらえるようになった(※特措法以前も95年の政治的和解以降補助金は降りている)。その代わりに、国主導で取り組みが進むようになってしまった。当然一部の市民からの反発はあるが、一方で補助金に依存しているという現状もあり、市や市民の声は通りづらい傾向にある。「ごみ23分別」や「村丸ごと生活博物館」など、市民や自治体が尽力して全国的に有名になっている取り組みもあるが。)国は水俣病事件の幕引きとして、「再生」を謳っているのである。

④感想

個人的には、他の地域再生に取り組む地方都市と比べれば水俣は補助金などの面で恵まれているから、あまり贅沢なこととは言えないのではないかという気もした。

一方で、このようなやり方で水俣病事件の責任をうやむやにしようとする国のやり方には疑問を感じるとともに憤りすら感じた。補助金を与えた上で地域再生

を独自に指導していくなど再生できるはずもないし、力の強弱を利用した卑劣なやり方だと言わざるを得ない。もし本当に水俣の再生を助けようと思うのなら、下（市民）からの自力での活動がなければ進まないだろう。何も無い土地に雨が降り続けても何も起こらないわけで、しっかり根付き成長できるような環境作りだけで、芽が出てきたら適度な雨を降らせればいいのである。

今回水俣を訪れて本当に素敵なお店だと感じた。だからこそ原田さんらの取り組みがこの状況を打破して水俣の発展につなげてくれることを信じて、これからの水俣の動きに注目していきたいと思う。

（担当：片山啓史）



2) 高峰武さん

1952年に熊本県玉名市で生まれ、高校卒業まで熊本県で生活。早稲田大学卒業後、1976年に熊本日日新聞に入社して現在は取締役論説委員長を務め、主に社会部で司法、遊軍を担当している。

①熊本日日新聞について

熊本日日新聞（熊日）は昭和17年に設立された。昭和16年に太平洋戦争が開戦し、物不足の解消と情報統制のために新聞統合令がだされ九州新聞などといった当時熊本県内にあったさまざまな新聞が統合されたことを背景とする。

現在では朝刊33万部、夕刊7万部を発行し熊本県民の約7割の人が読んでいる。地方では熊日と同じように県内の6割から7割のシェアを持つ新聞社がある県が多いため、地方紙のほうが全国紙よりも影響力が強い。

②水俣病に関する熊日の報道

熊本日日新聞は昭和29年に「猫てんかんで全滅」という記事をだしているが、猫が減っているためにネズミが増えていて困っているという内容でしかなかった。

その後2年間人間が亡くなってしまいうまで水俣病に関する記事はなかった。水俣病に関する様々な事実が明らかになった現在から見ればこの記事から分かることも多いため、一つの出来事から想像力を働かせてその後を考える必要性をこのことから認識して、記者として反省した。

現在でも外国の視点から見た水俣や国内から水俣がどのようにとらえられているかがわかるような記事を熊日は取り扱っている。

③水俣病に対する熊日の立場

昭和50年8月の記事によると熊本県議会の議員が「患者の中にはニセ患者がいる」といった内容の発言をしたとある。このことを記事にしたのは熊日だけであったため、患者側が熊本県を訴えた時にこの発言がなかったことにしてほしいと県から熊日へ要請があった。結局この要請には応じず、新聞記事をだしたが、県は熊日の報道が誤報であると主張した。このような背景があるために新聞社としては珍しく訴訟に補助参加をした。これは水俣病解決に貢献するためにとった立場であり、高峰さんは現在でもこの記事を読み返して熊日の立場を再確認することがある。

④原発の問題と水俣病との関連性

まず、日本で原発を稼働し続けることについて高峰さんははっきりとした意見を主張はしていなかったが、福島原発事故によって日本で初めて人が住めない土地をつくり、何が起こったのかも正確にはわからないといった状況をもう少し深刻に考えなければならぬとおっしゃっていた。また、原発の5割が福井、福島、新潟などに集中しているいびつな状態は変えていかねばならないと語っていた。

次に、現在の原発の問題と水俣病にはいくつかの類似点があると伝えてくださった。

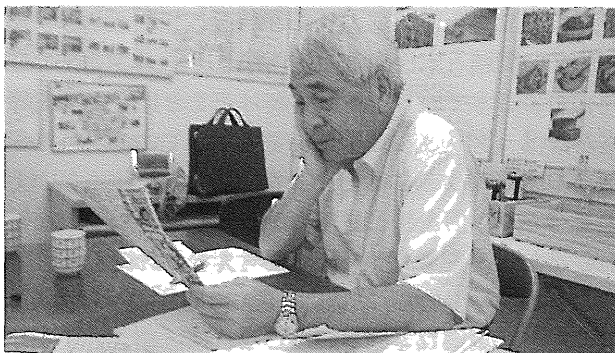
問題の原因が国策にあり、問題が起きた場所が特定の企業の「城下町」になっていたことだけが共通しているわけではなく、両方の問題とも「規制の虜」と呼ばれる状況が生まれていたことに加えて、大多数の人の利益のために少数の人々が犠牲にされているという点が二つの問題の大きな類似点であることを強調されていた。

「規制の虜」という状況はあることに対して規制を設ける立場にある人々が規制を受ける立場にある人々よりもそのことに関して持っている情報が少ない状況を指すそうだ。東電が政府に、チッソが水俣市や熊本県に情報を与えながら規制を受けていたと考えるとこういった状況が生まれていたと理解できる。

多数派の人々が利益を確保するために少数の人々が犠牲になる状況のことを高峰さんは「大と小」と表現されていた。原発の問題では危険な状態におかれていた福島県民が少数派、不自由なく電力を使っていた多くの人を多数派と考え、水俣の問題では排水の停止を最初に求めていた漁民を少数派、チッソの運営の方を重要視した人々を多数派と考えればこの構造が理解できる。

⑤感想

高峰さんは水俣市で生まれ育ったわけではないので、昔の水俣の状況や水俣市民がどのようなことを考えていたのかなどといった話を聞いたわけではなく、客観的な事実の説明が多くなった。その分、水俣の問題と現在起きている様々な問題の関連性を現役の新聞記者がどのようにとらえているのかを知ることができて興味深かった。また、最後に「若いということの特権は様々なことをひとに聞けるということであるためいろいろなことを聞いた方がよい」と伝えられ、様々な人の話を聞いて世の中に対する自分の認識がずれないことの重要性を改めて感じた。(担当：岡田)



2日目午後

3. 水俣病関連施設訪問

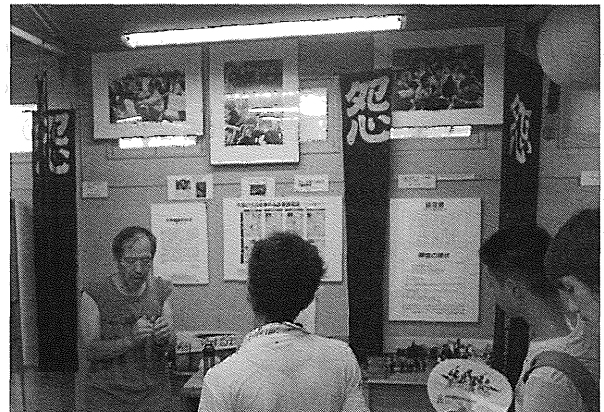
1) 相思社（遠藤邦夫さん）

①歴史考証館にて

建物に入って右手のところに、一見すると家族だんらんの夕食のように見える写真があった。しかし、その写真はすでに水俣病の原因が魚に含まれるメチル水銀だ、と分かった後の写真なのだ。遠藤さんいわく、犯罪の「証拠写真」だそうだ。また、その家族が食べていた魚は平均 11ppm のメチル水銀が含まれていることが分かっていた。つまり、魚が危険だとわかっていたのにそれを発表しなかったのだ。まさしく犯罪であると思う。

歴史考証館には水俣病の被害や被害者ばかり取り上げるのではなく、チッソについての展示もあった。そ

こではチッソの企業としての有用性や悪質性についての展示があった。チッソは一企業として社会に有用なものを作った反面、水俣病を発生させ、さらにそれを自社のせいではないと言い張った。例えば、チッソの技術はドイツの技術を真似ており、メチル水銀が発生することは分かっていたのに裁判では知らなかったとうそを言った。また、有罪となった裁判のあと、チッソはできるだけ事を荒立てないために上告をしようとせず、国の後押しによってしたという。



僕たちは、被害者の方たちがチッソへの抗議に用いた《怨》という文字が書かれた旗も見ることができた。写真で見るとより大きく、迫力があつた。純粋に怖いと思った。

水俣病の最初の患者が確認されたのは 1953 年である。チッソは当時そのことに触れ、私たちは 1932 年創業であり、今頃被害が出てきたなら私たちのせいではない、と言ったという。しかし、チッソの創業は 1943 年からであり、そのことにチッソは触れていないのだ。

1969 年 11 月生まれの人までを水俣病と認定しているが、メチル水銀の ppm 値が基準以下になったのは 1997 年のことである。線引きは難しいが、80 年代生まれの患者で疑いのある方もいるのだ。

1968 年、水俣病が公害認定されたことでチッソが悪者だと決定した。患者たちは補償を求める裁判をしようと言ったが、それ反対して、冷静に、とんだめる患者もいた。その人たちももちろん内心は穏やかではない。それなのになぜ反対したのかというと、補償がもらえるほど症状の重い人は少数で、大部分の患者たちは補償がもらえないからだ。また、チッソに自分の家族や知り合いが勤めていて、あまり大きな声でチッソのことを悪く言えない、という人もいたという。

症状が軽い人の例として、感覚マヒがある。遠藤さんは 2 つの恐ろしい事例を挙げてくださった。1 つは、足の感覚がなく落とした包丁が足に刺さっているのに

気付かなかった人がいる、という事。もう1つは、小指の感覚が失われていて揚げ物中に小指も揚げていることに気付かなかったということだ。

今では患者の方々の多くは、水俣病を「なかったこと」にしたいと言っているそうだ。被害者と加害者がいるのだから忘れられるわけではないが、しかしもう終わったことだから、というのが理由である。ただ、「新たな被害は出さない」ことは誓っている。

②相思社内の和室にて

今の東電や国の言動が水俣病発生時のチッソや国とそっくりである。水俣病の教訓を活かせていない、いや、活かそうとしていないのではないか。いや、水俣病の教訓を作ろうとしていないのではないか。そもそもたった1000年もたたないくらいでは教訓など作れないのでは？

原発や工場のように便利なことは、リスクを伴わないということはない。どう便利とリスクを共存させるかが大事である。

1942年から1950年にかけて発生した、浜名湖のアサリ貝毒事件では浜名湖のアサリが原因の食中毒だとわかった時点で有毒物質の特定などより前に採取禁止とした。水俣病の際に禁漁にしなかったのは国の犯罪である。

和室には仏壇があり、水俣病の被害にあって亡くなった方々の位牌があった。これは相思社が声をかけ、ここに置いてもいいといった人のものだけ置いてあるということだ。なかには断る人もいたという。

④遠藤さんのプロフィール・信念・思い等

1978年に離婚し、それがきっかけとなって水俣へ移住し農業を始める。岡山から農業が嫌で水俣に来たのにまた農業をすることが嫌になって相思社の職員(というか社員)になる。今は63歳で、再婚した妻と、僕たちと同じ年の娘さんと一緒に暮らしている。遠藤さんが水俣病事件について反省していることは、患者の保障に重点を置きすぎてもっとはっちゃけたことをしなかったことだという。水俣病事件から時間が過ぎた今、原発が問題になっているが、『権力が変われば社会が変わる』というわけではない。

⑤感想

相思社まで行くのは大変だった。あの酷暑の中、自転車ですり急坂を登るのはつらかった。しかも、歴史考証館の中は風通しが悪くとても暑かった。和室に入る前に、水道から水をいただいた。遠藤さんによるとあそこの水は美味しいらしい。ザル田となにか関係があるのだろうか。僕には水の美味しさはよくわからなかつ

た。そういえば東京都の水も美味しいって言われている気がする。遠藤さんは気さくな方で、とても話しやすかった。ただ、自分の芯をもっているというか、自分の意見は確立させておれないようにしている印象を受けた。何年も同じことに関わっているとそういう信念のようなものを持てるようになるのだろうか。歴史考証館は1日目に行った水俣病資料館より、より地域や地域の人々とかかわりの深い資料や展示物があると思った。当日はあまりじっくり見られなかったのがやしい。(担当：塩野)

2) JNC水俣製造所

JNC水俣製造所は、JNCの工場である。JNCは水俣病の原因企業とされたチッソが分社化され、その事業を引き継いでいる企業で、今回はJNC水俣病との関わりについてお話をうかがうために訪問させていただいた。

この項では、なるべく伺ったことをそのまま書くため、まとめというよりは当日の流れをそのまま文章化したようになっている。少し読みにくいかもかもしれないが、ご理解いただきたい。

①JNC水俣製造所の立地

JNC水俣製造所は水俣駅の正面に位置している。住所は水俣市野口町1-1で、野口町というのはチッソ創業者の野口遵の名からとられている。また、駅前に工場が作られたのではなく、工場の前に駅ができたというお話もあり、水俣においてチッソの影響力はとてつもなく大きいものであったことを表している。

取材当日は、水俣駅から貸し切りの水俣観光バスでチッソ構内に入場し、始めに正門からすぐの会議室に案内していただいた。

②JNC水俣製造所の紹介映像

私たちは会議室に入るとはじめに、JNC水俣製造所のPR映像を見せていただいた。

映像では、JNC水俣製造所で製造しているものとして、液晶材料、シリコン化合物、化学肥料があり、特に液晶材料は世界シェア50%だというものであった。また、工場敷地内、水俣市内には多くのJNC関連会社があることや、自社の水力発電所で全電力をまかっていること、工場排水の浄化についてなどの内容であった。

映像を見たあとに木戸さんから簡単な説明もあった。

JNCでは500名の社員が働いているが、工場内の関連企業の従業員も合わせると2500名いて、工場は24時間3交代制だということ、地域貢献に積極的に参加していることなどのお話だった。

③質疑応答

映像を見たあと、事前に送付した私どもの質問に答えていただいた。ここではQ&A形式でまとめる。一部は企業としてではなく木戸さん本人の意見も含まれている。

Q. 水俣病を起こして以降、同じようなことを繰り返さないためにどのような対策がされているのか？

A. 自社の排水については、無機のものとは有機のものに分けられ、無機のは化学物質で中和し、液体部分は国の基準値の半分以下の基準値で排出し、沈殿物は焼却してセメント材料として使われる。有機のものは「活性汚泥処理装置」という装置内で細菌が処理し、肥料の材料となる。また、この活性汚泥処理装置の技術は水俣市のRBSというし尿を肥料にする装置にも使われている。また、工場で発生した廃棄物については24種類の分別が行われている水俣市の処理方法に従って廃棄している。

工場内で何か異常があった場合は、まずそのラインを全てストップさせ、原因を検出し解決しない場合はそのラインはそのまま使用を停止するというシステムになっている。

Q. JNCの社員は水俣病についてどのような思いがあるのか

A. 50代以上の水俣病の起こった当時の社員の中では語るのがタブーとされており、向き合っていない社員も若干いる。これは、急には変わっていき、難しいものである。若い世代の社員は、水俣病についての正確な知識を持っており水俣病を語ることに抵抗は少ない。直接関わっていないので先入観もなく捉えられる。水俣病の教育はいろいろなものがあり、例えば、水俣病についての記事などがまとめられたサイトがあり、社員の個人のパソコンで閲覧できるようになっている。

当時働いていた世代の人々の正直なものは、会社を大きくしようとしていた中で声を上げられず、こんな大事になるとは…と思っていた。若い世代は、もう少しちゃんとなっていればよかったという思いがあり、しっかり働き、JNCを潰さず、引き継いでいくという思いである。

Q. 社名が変わってからどのような変化があったか

A. これまでより海外企業との取引が増えた。JNCの技術は世界で必要とされているが、公害を起こした企業だというイメージが付きまとい、取引ができていないことがあった。社名変更によってそれを乗り越えることができた。最近の事例としては、リチウムイオン

電池の正極剤を作る契約がドイツの企業と結ばれたということがあった。

Q. 国が7月31日に水俣病救済の認定を締め切るが、チツソとしてどのように考えているか？

A. これはデリケートな内容なので、上層部に伺いを立てた。その結果、「とにかく早く申請してください」とのことだった。

ここからはこの質問に関する木戸さんの個人としての意見となる。ただ、お話していただいたことに補って文章化しているので、若干ニュアンスが変わっている部分もあるかもしれない。

- ・水俣病の差別や偏見によって、救済の申請をすることができない人も存在する。ただ、そのような人は申請をしても他人からはそれを隠すし、申請をして差別や偏見が変わるわけでもない。

- ・救済申請の問題として報道されている人々は全体としてはほんの一部の事例であり、大多数の申請は問題なく行われている。

- ・この特措法で申請があった5万人という数字は当時の水俣の人口に匹敵するものであり、救済者の人数としては結構な人数がなされたと思う。

- ・もし、本当に患者を見つけ出すのであれば、救済の存在を知って申請やそうしないことを選択している水俣、熊本の人へ情報を発信しても意味がなく、世界中にこれを発信しなければならない。そうでない限り、申請の期限を延ばしたところで変わらない。

- ・救済の申請をしている人は既にしてしている。申請をしたくてもしていない人はもし期限が延びたとしても結果は変わらないと思う。

- ・水俣病で悩んでいる人はこの申請期限が延びると水俣病についての辛い期間が延びてしまう。救済を申請しない人は自分で納得した理由を持っており、もし申請の問題で悩んでいる人は、この期限を期に他人への相談などをして、苦痛が楽になっていこう。

Q. 現在は水俣市民と水俣工場はどのような関係なのか

A. 従業員はほぼ全員水俣市民である。水俣病問題では、加害企業の社員が被害者でもあるという複雑な構造である。社員の中には認定患者や裁判中の人もおり、水俣市民でJNCと関係ない人のほうが少ない。具体的なものとしては、JNCではなるべく水俣市内の小売店から食品などを仕入れるようにしている。

以下は、また木戸さん個人的な意見としてお話しただいたものである。

- ・水俣病問題は100%チツソが悪いというものでもな

く、市民ひとりひとりが企業として、市民として、複雑に関わりあっており、一つの形だけでは決められない問題である。「水俣から来た」というだけで他の地域では恐れられることもあり、その点では水俣市民全体が被害者でもある。

・現在は激しい症状の人はほとんどおらず、普通の生活を営んでいて軽い症状が出ているような人がほとんどである。従業員の中にもそのような人がいるかもしれないが、特にそれを他人は知らないし、普通に付き合い合っている。

・木戸さん自身も1967年生まれで、最近は何もしていないときに手が震える。ほぼ生活に支障はないが、特措法に申請したら条件を満たしているのでおそらく申請が通る。ただ、理由は自分でもよく分からないが、申請するつもりはない。ただ、1970年以降に生まれた人でもこのような症状の人がいることがある。

・小さい頃、魚のおつかいに行って、店の人が「もう魚は売れない。遠くのものしかない」と言っていた。その後、親は自分に魚を食べさせなくなった。その10年前くらいには宣伝車が「魚をとるな」と回っていたという話もあった。そのように当時の水俣ではすでに魚が危ないと分かっていたが、その中でなぜ、1970年以降に生まれた子供の親は親として子供に魚を食べさせていたことが疑問。漁師の家であるために食べさせられた場合もあるかもしれないが、そのような子供の親には親としてなぜそうしたのかという疑問が残る。小学校一年生の頃には学校で水俣病の話題が出ていた。

・5万人以上が申請したことについては妥当だと思い、それは水俣市民以外の人や、天草などの近海、山のほうに住んでいる人も魚を食べているからである。不知火海の南側には海流が回っていて、そこに遠くからとりにくる漁師もいたほどであり、水俣病の救済を単純に市区町村で分ける線引きには疑問がある。

Q. チッソのホームページに書いてある記述の立場について

A. 上層部の人間は、被害者と直接対立してきた人だから、なかなか記述は変えられない。(「～のような努力をしてきたが、また裁判が起こり・・・」などという内容)まだ、改善は難しいが、従業員の中には水俣市民のような感覚の人もいる。

Q. 木戸さんは救済の申請しようと思わないか

A. 自分でもなぜだかは分からないが、申請しようとは思わない。おそらく、お金をもらうのに抵抗があり、自分の中でおおっぴらにしたくないという気持ちがある。友人にも申請することを誘われるが、自分でもこ

うやって線引きをしているのかとを感じる。このように悩む人のために、7月31日で区切りをつけるという意味があると思う。

Q. なぜ木戸さんはチッソに就職したのか

A. 水俣で一番安定している企業で、父も勤めていたため。イメージでは、安定した企業というのが水俣病の企業というイメージを上回っていた。

Q. 水俣工場をもっとオープンな場所にする気はないか

A. 上層部の人に提案をすると、「ここは化学工場であり、見せるところではない」と言われる。また、水俣病についてあまり触れると、違う方向のことをやっているのではないかという指摘もある。上層部の人で水俣病についてオープンにできる人は少なく、まだ当時からの社員は頭が固く、そのような人が退職する10年後には大きく変わると思っている。

ただ、このような(木戸さんが個人的な内容を語るような)話をしても企業からこの立場を任されているということもあり、少しずつは変わろうとしているようだ。見学の依頼は全て受け入れており、2011年は144件、2000名を受け入れた。

Q. 水俣病は一種の観光資源でもあるのか

A. 「水俣病学習で来た」と言われると警戒する。環不知火プランニングからだ企業が断るが、学校から直接連絡をしてもらえば木戸さんが案内をする。今でも遠藤さんや吉永さんは個人としては仲がいいが、企業としてはとても怖い人という認識である。

逆に捉えれば、木戸さんにこの仕事を任せて、企業としては防波堤にしている。木戸さんの話で問題となればそれは企業の責任ではなく木戸さんの責任として扱える。

木戸さん本人は、会社としてのコメントと企業としてのコメントの2つをお話するようにしている。

Q. 分社化、社名変更による風あたりはあったか

A. 始めは「新しいプラントを建てて、逃げるのではないか？」と思われていたが、一つ一つ説明をしていくことですぐおさまった。水俣市民には工場関係者が多く、正しい情報は数週間で広まっていった。口コミの情報伝達が一番多い。報道では全てを伝えきれず、水俣病問題では被害者の立場にばかりたっている。ただ、水俣市民はそのようなものには惑わされない。

④展示室

お話のあと、JNC水俣製造所の展示室に案内していただいた。展示室では、JNC水俣製造所で製造されているものの紹介、製造過程、社会貢献、国内や海外の

関係会社、歴史などのパネルが並べられていた。普段ここは一般公開されていない。ちなみに、企業を PR する場所であるから当然なのかもしれないが、水俣病に関する記述に関しては一切なかった。



⑤工場見学

その後、さきほどの観光バスに乗車し、水俣工場を一周した。企業秘密のものも多いから観光バス内からの見学になった。もちろん全て撮影禁止である。水俣市内に入ってから2日目であったが、工場外はごく普通の田舎町という感じの印象を持っていたが、この工場内だけは都会の雰囲気を持っていて、独特であった。工場内には油や酸素などのパイプラインがいたるところに張り巡らされていた。工場内には専用トンネルを抜けたところには専用港もあった。古くなって使われなくなった工場や、自社の発電設備、寮などもあった。ただ、写真撮影禁止だったため、詳しいことはあまり覚えていない。工場見学が終わった後は木戸さんとお別れとなり、そのまま水俣駅へ戻った。

⑥感想

JNC 水俣製造所の見学は結構楽しみにしていたので、行く前からいろいろ想像を膨らませていた。これまで JNC については大野先生のお話と簡単な調べ学習でしか知らなかったのだから、実際に行ってみて印象がいろいろ変わった。やはり、水俣病の原因企業というイメージが強かったが、実際の JNC は普通の企業だという印象を持った。ただ、水俣に立地しており、従業員の大多数が水俣市民であり、過去に水俣病を経験している社員や、水俣病の患者の社員もいるこの企業では、なかなか複雑に水俣病が絡んでおり、水俣病について語るのはまだ難しいのかなという印象を持った。

訪問前は木戸さん個人のお話が聞けるとは思わなかったが、結果的に木戸さんの水俣市民、チッソ社員、水俣病患者としての立場のお話を聞くことが出来、リアルなお話を聞いてこちらのほうもとても勉強になっ

た。いろいろなお話を聞いたが、木戸さんを含め水俣市民は水俣病について語ろうとする人は少ないが、いろいろな立場で水俣病と関わっているということが分かった。

(担当：片山奎介)

3日目午前

4. 水俣市民に聴く(2)

1) 石牟礼智さん

昭和8(1933年)年生まれ。お父さんが窒素肥料株式会社(以下、窒素という)に勤めていて、転勤に伴って満州・朝鮮半島へ。1943年からは窒素肥料株式会社・興南(フナム)工場(現在の朝鮮民主主義共和国咸鏡南道咸興市)へ。朝鮮半島で日本の敗戦を迎え、そこから命からがら帰ってくる。その後自身も日本窒素肥料株式会社水俣工場に勤め始める。窒素株式会社とは労働争議で戦い、ストライキ等を積極的に行ってきた。千葉にある野田工場にも勤めたこともあった。1976年退社。以後、朝鮮での経験をもとにした講和をしている。『苦界浄土ーわが水俣病』などの水俣病に関する作品を書いている、石牟礼道子さんは彼のいとこである。石牟礼さんにはその人生、特に朝鮮での体験を多く話してもらった。

①朝鮮にて

石牟礼さんは先ほど述べたとおり、お父さんの転勤に伴って朝鮮の興南工場の社宅に住んでいたところがあった。窒素株式会社はもともと電力会社だったこともあり、その工場はすべて自前の電気で作業していたのだが、興南工場もその例外ではなく、窒素は興南の町を整備し、発電所を作った。黄海側に流れる鴨緑江という川を日本海側まで引いて落とし、発電を行っていた。(朝鮮半島の日本海側の陸地は黄海側よりも急峻なので、水を落とすと一気に発電ができる)余剰電力はピョンヤン・ソウルへ運ばれるほどだった。興南工場は当時としては最新鋭の設備がそろい、水洗トイレなど、電気で作動する今でいうオール電化のような感じだったそうだ。窒素は朝鮮だけでなく、インドネシア・マレー半島にも進出していた大企業だった。石牟礼さんは、こんな大きな企業を作った野口遵さんはすごい人だったのではないかと、言っていた。

朝鮮では現地の人も雇っていたが、日本人との待遇の差がかなりあった。たとえば社宅でいえば日本人用の社宅は広く、トイレも個々についていたが、朝鮮人用の社宅は狭く、トイレは屋外の共同トイレだったりした。また、雇う日本人の側が朝鮮人を差別することもあった。石牟礼さんは、現在でも韓国や北朝鮮はスポーツで日本と対戦したりすると眼の色を変えて戦っ

てくるが、その気持ちは理解できる、と言っていた。

敗戦と同時に満州はソ連の支配下に、朝鮮半島は朝鮮人の支配下になり、興南にあった日本人のものだった窒素の工場や日本人社宅・学校は全て朝鮮に接收された。日本人はこれまで朝鮮人社宅だったところへと移され、また工場も朝鮮のものとなってしまったので、これまで雇っていた朝鮮人の元に働かせにもらいに行く、という事態になったそうだ。朝鮮人側も工場を手に入れたとはいえ、主要な知識を持っているのは日本人なので、重宝されたそうだ。そして1946年の5月、朝鮮で日本人技術者流出防止のために船での脱出禁止令が出ると、石牟礼さんのお父さんはこのままでは日本に帰れなくなる、と危惧し、脱出を決意した。脱出の途中で盗みにあたり荷物を取られたりしてお母さんの遺骨（お母さんは大陸に一家で転勤してまもなく亡くなっていた。）やアルバムもなくしてしまったそうだ。何とか7月には熊本に帰ってくる事ができた、ということだった。

②労働闘争について

石牟礼さんは1948年、15歳のときにはお父さんにならって窒素に勤め始めた。1960年ごろは、日米新安保条約の反対運動など社会運動が盛んな時期で、石牟礼さんも多くの労働闘争に参加した。窒素に賃上げを要求する新日本窒素第一労働組合に入り、ピケをはって座り込みを行ったりした。会社は工場のロックアウトを行ったり、会社よりの組合（第二労働組合）を作って労組側の切り崩しを図ったりした。第二労働組合の人とは待遇に差があったりしたそうだ。組合はストライキを行い、生活費をカンパで賄って、炊き出しなどを行いながら対抗した。石牟礼さんは現在の労働状況について、最低賃金が生活保護費よりも低いのは問題ではないか、と語っていた。

③水俣病について

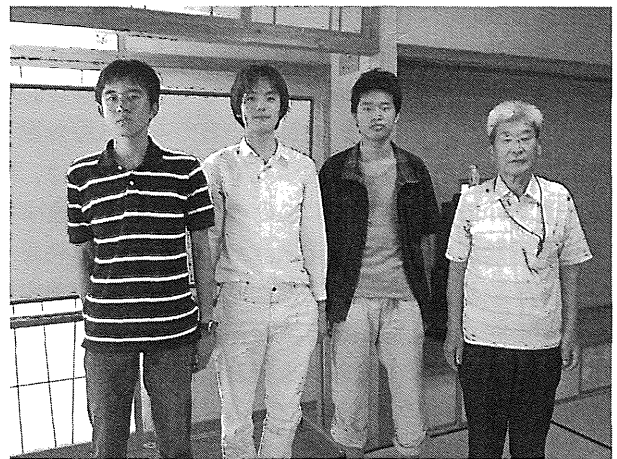
窒素に勤めていたために、最初水俣病の話が出たときにはやはり自分たちの仕事はどうなるのか心配だったそうだ。水俣病患者の団体は賃上げ闘争と同じく会社から冷遇されたが、1955年から1965年、労働闘争が盛んなころは水俣病患者の人たちとの連携、といったことは特になかった。1970年からは窒素の千葉県・野田工場に転勤になったので、水俣病の闘争が盛んだった1973～1975年の時は野田にいたため、あまり関わり合いになることはなかった。ただ、いとこの石牟礼道子さんは積極的に水俣病の闘争に参加していたので、彼女に呼ばれて様子を見に行ったことはあった。野田にこっそり熊大助教授で水俣病患者に尽力した原田正

純教授を呼び、社宅で診察してもらったところ、5名中2名が水俣病と診断されたこともあった。石牟礼さんは、水俣病について全員検査をすべきだったと語っていた。日本は問題をうやむやにになってしまうことがあり、それが問題である。けじめをつけるべきだ、ということだった。昨今の原発問題に絡めて言えば、原発は「トイレのない部屋」、つまり使用済み核燃料を捨てる場所がないものであり、また福島原発の事故について原因究明が住んでいないのに原発の再稼働が決まってしまったことなどを問題だと言っていた。また、原発の問題に対して若い人たちに考えてほしい、怒ってほしい、行動してほしいと語っていた。

④感想

石牟礼さんは現在79歳にも関わらず、とても元気で、面白い話を語ってもらった。自分自身の経歴をまとめたものを貰ったのだが、彼は地域の運動大会に参加して良い成績を修めていたり、自治会に参加したりなど、積極的に行動している人だということが分かった。そんな行動する姿勢が、その元気さを作っているのかもしれない。実際にいろいろなことを経験してきた方のお話を聴くことで、いわば生の声として昔の事を知ることができた。とても印象に残る経験だった。

(担当：中村)



2) 塩崎乃婦子さん

生まれと育ちは水俣で、大学進学のために東京へ。卒業後、企業に16～7年ほど勤め、母の病気を受け15年前に水俣に戻ってきた。東京の企業では英語の使える輸入代理店で仕事を行い、水俣に戻ってからは自宅で英語を教えるとともに、環境ガイドをしている。水俣の環境を守ること・原発を0にすることが目標だという。

①水俣病公式確認から55年を迎える水俣市からの緊急メッセージ

塩崎さんより資料として「水俣病公式確認から 55 年を迎える水俣市からの緊急メッセージ」をいただいた。いかに内容を引用する。

○国内外の皆様へ

今回の東日本大震災により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

この度の震災と津波により、原子力発電所が空前の被害を受け、見えない放射線に周辺の皆様方は不安な毎日を過ごしていらっしゃいます。

この事故は、私たちの生活のあり方に示唆や警告を与えるものとなっています。そして、時間の経過とともに新たな問題も起こり始めています。その問題は水俣病のこれまでの経験と重なり合う部分が極めて多く、水俣病の教訓を発信している水俣市としましては、今後のことが心配でなりません。

特に懸念しておりますのが、風評被害からの偏見や差別の問題です。水俣病の被害は命や健康を奪われることに止まらず、被害者を含め市民すべてが偏見や差別を受け、物が売れない、人が来ないなどの影響を受けたり、就職を断られる、婚約が解消されるなどの影響を受けたこともあります。言いようのない辛さであります。

原発事故のあった福島県からの避難者に対する差別や偏見を知り、水俣市民はとて心を痛めています。放射線は確かに怖いものです。しかし、事実に基づかない偏見差別、非難中傷は、人としてもっと怖く悲しい行動です。避難を強いられている方々の気持ちをしっかりと受け止めなければなりません。私たちは、冷静に正しい情報を共有することの大切さを求めますし、自らも避難者を温かく迎え入れていきたいと思えます。

また、国外からの偏見や差別も一部あるようです。水俣市で起こった悲劇を日本全体が受けかねない状況でもありますので、国外へも正しい情報の提供と国際的な理解を求めていく必要があると思えます。

水俣病のような悲しい経験を繰り返してはなりません。国内外の人々が互いに協力し、1日も早い復興に努めていきましょう。

2011年4月26日 水俣市長 宮本 勝彬

②市民どうしの関係

a. 患者の隔離・差別

塩崎さんが子供のころ、小学校には校庭の片隅に小屋があり、そこに水俣病患者は隔離されていた。さらに、そこには近寄ってはいけないといわれていたが、水俣病患者だということは知らされていなかった。また、胎児性の患者は学校から離れた病院にいて、存在

さえも知らなかった。また、病院でも水俣病患者は隔離されていた。そんな中、差別は自然に起こったという。

b. 患者と市民

当時、水俣病について話すのはタブー、というのが不文律として存在していた。なぜなら、水俣市民5万5千人の中で加害者(チッソとチッソ従業員)と被害者が共存していたからだ。そのときは約1万人がチッソに勤めていて、つまり家族のうち1人くらいはチッソに勤めていたのだ。するとチッソにつぶれてほしくないがために患者が補償を求めるのを好ましく思わない人がいた。だから患者が自分には水俣病だと公言できる雰囲気はなく、そうだと言えない状態が長く続いた。そのころのチッソは水俣市で一番大きな企業であり、それは駅の真正面に工場門を作ったことからその権力が想像できる。昔は鉄道の引き込み線が工場内まで続いていたし、工場長が水俣市長になったこともあった。

c. チッソの労働組合どうしの対立

まず、第一労働組合が労働者の権利を守るとして立ち上がった。続いて、第二労働組合が会社側に立って活動を開始した。初めはどちらの労組も水俣病患者を敵とみなした。しかし、第一労組はチッソはおかしいと気づき、患者を擁護するようになった。これにより、第一労組 vs 第二労組という構図ができた。

第一労組と第二労組の対立の中で、チッソにたてついた第一労組の人たちは第二労組の人より危険だったり不規則だったりする仕事が多かった。安賃闘争では第二労組の人々は悪人扱いされ、家の周りを囲まれたりしたという。

d. 東京から帰った時の水俣

塩崎さんが東京から水俣へ帰った時、市民はなんとかしなきゃという高揚感で明るくなっていた。「もやい直し」が広がり、さらに環境への取り組みも活発になってそれがいい影響を及ぼしていると塩崎さんは推測している。東京にいるとき、塩崎さんは水俣出身であることに触れたことはない。しかし今は水俣に生まれたものとしての責任を全うしようと考えている。

③観光客の見る水俣

日本の小学生は、水俣に来ると「色がある」と言うらしい。彼らは水俣をモノクロの写真でしか知らず、また水俣が明るいイメージもなかったのだろうか、水俣に色を想像していないのだ。

外国人の方は、どうしてまだチッソが存続しているのか、どうして犯罪者が今も操業を続けているのか、とても疑問に思われるそうだ。この問いに関しては塩崎さんも同意している。さらに、どうして戦わないの

か、どうして動かないのか、などと厳しい意見が飛び交う。また、なぜ不買運動をしないのか、という質問もよくあるのだが、チッソは様々な製品の原料を作っている会社であるため不買運動は無理なのである。塩崎さんはこの点について、国が不買的な措置を取るべきだったと言っていた。

海外の方は、胎児性の患者が今どうしているのか、ということについて心配してくれる。胎児性の患者は県や市の補助を受け民間で立ち上げた「ほっとはうす」で日中は一緒に暮らしている。しかし塩崎さんは、先の心配について国に答えを求めている。

④国・チッソの動きについて

チッソがあまり反省の色を見せないことにいら立つ。例えば見舞金契約だが、あとで破棄されたこの契約を提示したことを反省してほしい。

国は、チッソをできるだけ早く調査すべきだった。操業を止めるべきだった。漁を禁止するべきだった。こういう素早い行動を怠った時、影響が一番受けるのは弱者だ。国や企業はその弱者の身になって考えてほしい。また、非常時の行動では初めの一步を間違えてはいけない。

⑤現在の水俣の環境

a. 環境に対する取り組み

水俣はもはや環境産業でなければ生き残れない。水俣の教訓に学び、自ら動かなければ、ということで市も環境問題にはしっかりと取り組んでいる。水俣はごみを分別することにより埋め立てを減らし、企業に引き取ってもらえるゴミもある。その活動が認められ、国や民間から環境首都に認定されたり環境問題に対する取り組みのモデルとされたりしている。

水俣市は脱原発を目指して様々なエネルギー源に挑戦している。たとえば、太陽光発電・小水力発電・地熱発電などだ。これらに行政は積極的にかかわらず、市民がファンドを立ち上げて作るのだという。ちなみに、風力発電は外部資本が必要なことや低周波数などによる公害、バードストライクの危険性などを考慮し、反対している。JNCにも余剰電力を市民に使わせてもらえるようにしてほしいという。

b. 産廃と水の会

2004年、神奈川に本社のあるIWDが水俣に産業廃棄物処理施設を建設することが分かった。その建設場所が水俣市の水道水の取水地を流れる川の上流だと聞き、水俣病の経験のある市民たちはすぐに立ち上がって「水の会」を結成した。塩崎さんもそれに参加した。水の会が調べていくうちに、なんと当時の水俣市長が

IWDを個人的に誘致したことが分かった。ちょうどその年、市長選挙があったため、水の会は市長をやめさせる作戦を取った。当時の市の教育長を説き伏せて市長選に立候補させ、当選させようとした。ここで良かったことは、婦人会のリーダーであり、女性に対して影響力の強い人がこの話を宣伝してくれたことであった。この地元で根差した影響力で、1万1千票対7千票で水の会が立ち上げた市長候補が当選した。

市役所がリーダーシップを取るようになった水の会は、IWDの事業説明会に乗り込んだ。しかし、水の会のメンバーが質問をしようとするとう説明会は打ち切られた。そこで、産廃建設には県知事の許可が必要なため、熊本県知事に直訴し裁判の前に産廃計画は打ち切りになった。

水の会の主義としては、IWDが産廃処分場を作ろうとした場所、つまり水俣市民の水がめの上にゴミを捨てるのに反対することであった。産廃が不可欠なことは分かっているので、県が調査をしてOKを出したところで作るならまだいい。今、水の会は水俣の環境を守るために活動を続けている。

⑥塩崎さんの信念・教訓など

水俣病の教訓としては、①環境問題は元に戻らないこと。②経済優先で弱者を無視することは許されない。という2つである。遠藤さんが教訓は作れないと言ったことを話したら、遠藤さんは今の状況じゃ物足りないんじゃないか、とおっしゃっていた。

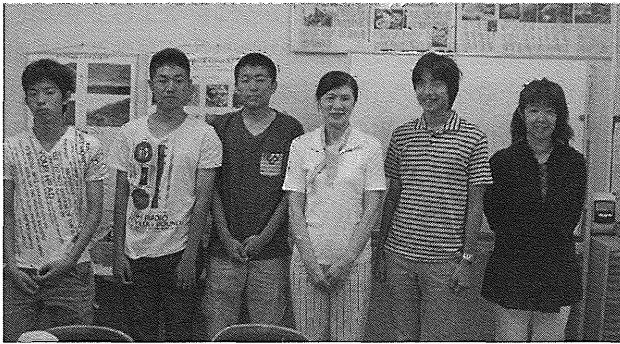
塩崎さんは、市民が集まればこれより強いものはない、とよく言っていた。逆に、行政は積極的には動かないとも言っていた。

風評被害については、風評被害は避けられないし、解決もできない。もしできるとすればそれは教育しかない、とおっしゃっていた。

最後に、今日一番伝えたかったことを言ってもらった。それは、「今の世の中の事象は全て自分に関係があると思う事」である。

⑦感想

塩崎さんはとても落ち着いて人柄の方で、うまく表せないけど好感が持てた。自分の人生を客観的にとらえることのできる人だった。どんな質問をしても期待した答え(質問にしっかりと対応した答え)が返ってくるのに、根底にある意識は変わらないような答えだった。(担当：塩野)



4 日目

5. 専門家に聴く

1) 宮北隆志先生 (熊本学園大学)

京都大学大学院工学研究科修士課程(衛生工学専攻)修了、熊本大学医学部衛生学講座講師を経て、熊本学園大学社会福祉学部福祉環境学科教授。

①地下水都市としての熊本

熊本市は日本一の地下水都市だそうだ。約100万人の住人が使う飲料水の100%を地下水で賄うことができるほどの地下水を蓄えている。火山灰が幾重にも積み重なって出来た天然の地層が地下水をろ過しているので、日本一とも呼ばれる水質を誇る。なんと、そのままミネラルウォーターとして販売できるほどらしい。

しかし、そんな恵まれた地質も、稲作を行おうとしても、水をため込むことが出来ない、『ザル田』しかつくることが出来ない欠点がある。

近年、地下水位の低下、湧水の枯渇などにより地下水の埋蔵量が減ってきている。そこで、市内では使用する水を抑えよう、節約しようという意識が広まっている。

カーボンオフセットという言葉がある。これは、使用したカーボン(炭)の量に応じて植林をすることで、自然資源の減少を抑えようという運動だ。現在、熊本ではこの地下水版を行なっている。田畑には水をため込む機能があるため、農業を支援することで、地下水の恵みを絶すこと無く、受け続けることが出来る。熊本学園大学では、この取り組みを『ウォーターオフセット(相殺)』と言い積極的に取り組んでいる。学園大内で消費した水の分に応じて、支援している農家のコメなどを食べることで、地下水の生産と消費をオフセット(相殺)している。これは、全国でも初の取り組みであるらしく、学園大はその先駆者として活動している。

これにはいくつかのメリットがある。

・農業を整備することにより、新たに約40万tの地下水を作りだすことが出来る

・環境に配慮されているシステムなので、エコ米としての需要がある。

・地元で生産したものを、その場所で消費する(地産地消)ことにより、フードマイレージを小さくすることが出来る、などである。

フードマイレージとは、食べ物が消費者の口に入るまでの総移動距離を数値化したものだ。移動にかかる時間を短縮することにより、ガソリンや電力などのエネルギー資源の消費をおさえ、かつ、大気汚染などの環境に及ぼす影響も抑えることが出来る。また、農作物を育てる際に大量に水を使用していることも考えると、貴重な水を外部に出さずに、守り続けることになる。また、輸送距離が長くなることによって生ずる、鮮度の低下及び産地詐称などを防ぐことも出来、農作物の品質維持にもつながる。熊本学園大以外にも、市内にあるレストランなどで、この取り組みは実施されている。

また、ほかにも幼稚園の屋根に太陽光パネルを設置するなどの試みも行われている。この設備費については、アサヒビールと提携し、アサヒビールのビールが1本売れるごとに、一円寄付されている。宮北先生いわく、地元のNPO団体や自治体がどの様に関わっていくかが、ターニングポイントになっている。

正直、話を聞いている時は、生産と消費の相殺という概念が理解出来ていなかった。農作物を外部にまわすことで、流通を活発化させた方が・・・なんて、やや論点がズレていることを考えたりもしていた。そもそも、水が資源として扱われているという実感がわかなかった。水道でいくらかでも出てくるし、そこら辺に、ペットボトルやら缶やらに詰められて置いてあるから、水=いくらかもあるものという先入観があったからだと思うけど。やっぱり、これは長いこと都会暮らしだったせいなのだろうか。

②福祉環境学

福祉環境学とは、生活環境の質(QOL)をどの様にして高めていくか、というものである。主に社会的弱者と分類されてしまう人々、例えば、低所得者、高齢者、障害者の方々のことを指す。QOLという言葉がさしている“LIFE”は色々な意味を含んでいる。人生、生活、生命など多くの意味があるので、最近では色々な場所で耳にする。QOLを上げていくには個々の努力だけではなく、複数人が集まり、いかに信頼関係を築き、助け合っていくかが重要なのだという。この助け合いのことを、『社会関係資本』と言うらしい。

社会関係資本を作り上げていくうえで、さまざまな障害がある。国家間、都市間におけるあらゆる格差、

身分や立場、思想の違いなどだ。当然、話し合いをすすめる段階で、意見に違いが出てくる。それをまとめあげて、一つの形にし、計画、提案することを合意形成という。

合意形成に至るものの手法としては、ワークショップ、パブリックインボルブメント、パブリックコメントなどの種類がある。どれも、市民を地域行政に関わらせることで、市民の意見を反映させることが出来る。熊本市でもこの様な取り組みが行われている。『円卓会議』といい、研究職や役人、一般市民などが一つの場所に集まり、対等な立場として話し合う、というものだ。この試みには市民側から多くの異議が出ている。

- ・話題が難しくついていけない。
 - ・対等な立場でと言われても、気にしてしまう。
 - ・スポンサーが付きにくい為、予算がない
- などの問題がある。

一応、予算については、国から2億円の予算が下りているものの、やはりそれだけでは足りないらしい。

それはともかく、まず解決すべきは一般市民が、会話に入りにくい点にあるだろう。市が主導の勉強会などを開くことで、知識そのものに関しては今後補っていけると思う。ただ、知識がある＝話し合いの場で議論に参加できる、にはならない。知識を増やしたところで、それを使って自分の意見を練り、話し合いですり合わせるには、また別の問題だ。いきなり、あらゆる立場の人間がいるところに一般人を混ぜるよりも、市民たち同士のみのお話し合いの場を増やし、いくべきだと思った。

③水俣病

今現在、JNC で働いている人たちは、水俣病事件には一切かかわっていない人たちだ。彼らには何も責任がないので、お互い直接的なうらみもない。ということで、本来であれば歩み寄りには可能なはずだ。しかし、

- ・解決した問題を掘り起こしたくない。
- ・チッソは倒産以上の苦しみを味わってきた。

という意識がチッソ内にあるせいでいまだに歩み寄りはなされていないとのこと。そのせいか、つい最近まで熊本学園大は JNC 内に入れなかったとのこと。熊本学園大だけでなく、熊本市の職員も同様の扱いを受けていたらしい。正直、『彼らには責任はない』などこちら側が相手を下に見ているところにも問題はあると感じた。相手に対して、『許してあげる』だの、『責任はないよ』と言っても、そのほとんどが上からの発言であれば、JNC がいくら歩み寄ろうとしても、上下関係のようなものが出来てしまい、結果として歩み寄り

はなされない。まず、相手に改善を求める前に、自分たちを改善すべきだろう。

とはいえ、『水俣病は殺人事件』という認識を持つことは重要だろう。JNC との歩み寄りには一切必要のない考えだが、今後の企業による公害問題を防ぐために必要なものだ。事故という認識では危機感が足りず、同じことを繰り返す可能性がある。

④感想

水俣 SSH で、取材して回った人の中では、一番奥が深い話だった。それぞれの項目の感想は、もう書いたので全体を通してのことを考えると、地域社会学って色々な要素が詰まっていて面白そうだった。今回は熊本ということで、地下水が大きくかかわっていたり、水俣病の教訓が生かされていたりしていた。大した特徴もない国政と違って、それぞれの土地の特色が色濃く出ていて、そこから、市民、土地との繋がりが感じ取れて面白かった。(担当：内海)



4 実習を終えて

4.1 実習後のゼミ

第5～7回：水俣実習のまとめ〈9月8日〉

〈10月13日〉〈11月10日〉

実習で得られた成果を3回のゼミの時間を使ってまとめていった。フィールドワークは記憶が薄れないうちにまとめることが肝要だが、なかなか作業は進まなかった。ただ、昨年と比べると生徒のまとめは早かった。しかし、聞き取った内容を検討することに関しては、分担を決めたことにより他の担当のまとめに関してはあまり意見が出なかった。この部分については昨年同様今後の課題として残った。

第8回：経験の共有－ゼミナールオープン

〈1月12日〉

実習の体験を報告する場として、今年度も昨年に続いてゼミナールオープンの機会を利用した。これは、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業の一環として位置づけられているものである。ゼミナールを中学3年と高校1年生（おもに高校入学生）に公開し、将来の展望をもたせようというものである。昨年度から夏の実習報告を行っている。最大で50名以上の中3・高1が報告を聞いてくれた。事前に発表の要点をパワーポイントにまとめ、聴き取り先1人あたり15分程度でコンパクトに発表した。自らが得た経験を発信することで、さらに内容を充実させることができた。それらをふまえて今年も報告書づくりに取り組んでいる。報告書は2月には完成する予定である。

第9回：卒業研究構想発表

〈1月26日〉

高3で取り組む卒業研究の個人テーマについて報告する予定。

ちなみに昨年度の受講生は、高校3年となり、卒業研究に取り組んだ。そのテーマを列記してみると、

- ・水俣の地域再生
- ・水俣病と福島第一原発事故を通して見る日本社会の『犠牲』の仕組み
- ・国民の「安全」についてー東日本大震災と原子力発電所事故ー
- ・チェルノブイリ原発事故と福島第一原発事故における被災者救済の比較
- ・旧産炭地域の財政再建
- ・北方領土問題

等々である。提出された研究のテーマとしては、昨年水俣で数多く出された福島原発事故との関連を追究しているテーマが多い。やはり水俣を訪れることによって、生徒の問題関心が広がるとともに深まっていることがわかった。

5 まとめと今後の展望

今回の参加生徒の感想を以下に示す。

「僕は小学生のころは、水俣病をあくまで受験の知識の一部としか捉えておらず、水俣に関して、特別興味を持っていたわけでもない。自分がまだ生まれてもいない時代のことなので、時代背景などが違い、自分の立場として考えられなかったからだ。しかし、3・11や福島原発問題など、水俣病問題とほぼ同じような問題がつい最近発生し、ようやく興味を持てるようになった。

水俣ゼミとして、色々な場所を回り、いろんな人の話を聞いてきた。水俣病に関する話であったり、地域社会経済など期待していた以上の話を聞くことができた。中でも、話をしてくださった方々の“体験談”が心に響いてきた。話をしてくださった方々はみな、自分から何かを成し遂げよう、何かを変えてやろうという意思で活動していた。それは、水俣の街を復興させたいという目標だったり、革命家になって世界を変えたいという野望であったり、生きて日本へと帰りたいという強い強い意志で、僕には何一つ持ってはいないものだった。水俣病に関する知識よりも、そういう伝わってくる物の方が大事なんだと築いた。

いくら、知識として水俣病について知っていたとしても、結局はその時代を生きていった“人”について知って初めて理解できるものだったと思った。正直、『結局は〇〇なんですよ?』としか考えることのできなかつた、自分の浅はかさを痛感した。

同じ水俣病について話しても、話す人によって主張や捉え方など色々なものが違って、そのすべてが自分のとは違うということがとても新鮮だった。出来ることなら、今回話を聞くことができなかった人の話も聞いてみたい。

フィールドワークではただ、本を読んだり、ネットで調べたりするだけでは知ることができないものを沢山知ることができた。物事をむやみやたらと理論的に考えようとするのではなく、そういった人の感情や思いを大事にしていきたいと思う。」

第3次のSSHを始めるにあたって、2次の5年間にわたる「科学者の社会的責任を考える」実習づくりをふりかえってみたが、生徒が教室の授業では得られない豊富な実体験を積み重ねたことがよくわかった。その成果をもとに3次でもこの企画を継続して行なうことにした。

この3年間、ゼミナール担当者は1名であったが、実習は社会科の教員2名で引率した。そのことにより、フィールドワークのノウハウを拡大することができたと考えている。しかし、昨年あげた課題の中で、

・聞き取った内容の相互検討が充分に行われていない。

・実習をふまえた事後の学習が深まっていない。

などはまだ解決できていない。第3次のSSHでは水俣以外の場所での実習の検討も含めてフィールドワークの可能性をさらに追求していきたい。